



Title	現象とロゴス：フッサー現象学における基礎づけの理念と意識の志向性
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/2441">https://hdl.handle.net/11094/2441</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 <sup>き</sup>紀 <sup>ひら</sup>平 <sup>とも</sup>知 <sup>き</sup>樹

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 7 4 5 2 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科哲学哲学史専攻

学 位 論 文 名 現象とロゴス—フッサール現象学における基礎づけの理念と意識の志向性—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 鷲田 清一

(副査)

教 授 中岡 成文 講 師 本間 直樹

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20 世紀ドイツの哲学者、エドムント・フッサールがその生涯を通じて取り組んだ「学問の基礎づけ」の理念と方法を仔細に検討することを通じて、彼の提唱する「現象学」という哲学的思考がどのような可能性と限界とも併せもつものかを論じたものである。

論文の全体は、大きく二部に分かれる。

第1部の「存在の認識——学問論としての現象学」では、諸科学を基礎づける学問論が諸判断の統一の規則を明らかにする論理学を基礎とし、さらにその論理学は究極的には現象学によって基礎づけられねばならないという、フッサールの現象学的な学問論の理念を検討している。

まず、学問の理論形式に関わる学問論としての論理学がもつ三つの課題を提示する。第一は判断の形式に関わるもので、意味と無意味の区別、論理文法、命題の体系化規則などが問題となる。第二は判断の形式、とりわけ判断の結合に関する規則に関わるもので、それを真理の形式的な条件という観点から問題とする。第三はあらゆる可能な理論形式に関わるもので、これは純粹多様体論として問題とされる。そして、フッサールの現象学においては、全体と部分、多様性における同一性、現前と不在という、三つの形式的な構造がくりかえし現れてくるというソコロフスキーの指摘や、フッサール自身が詳しく言及しているヒルベルトの完全性公理やヘルマン・ワイルの直観主義など当時の数学理論とも関連づけながら、数学者として出発したフッサールの論理学の理念がどのように構築されていったかをたどる。そして第一部の後半部分で、学問の基礎づけとしての論理学の構想が、たんに「形式的論理学」の次元にとどまっているかぎりには真理の論理学としては不完全で、判断だけでなく、判断の対象となるものがまさに対象として現れてくるそのプロセスそのものの解明を含んだ「世界の論理学」としての「超越論的論理学」へと展開されねばならないことを示す。

第二部では、フッサールがこうした「超越論的論理学」という課題を、「現象学」としてその後どのように展開していったかを分析する。そのために第二部前半では、初期の『算術の哲学』から『論理学研究』、さらには中期の『イデーン I』へと三段階で進む「現象学」の理念と方法論（とりわけ「現象学的還元」という操作）の展開を仔細に検討し、論理学における判断論が「超越論的現象学」においてはノエス—ノエマ関係の分析として定式化されるのを見る。後半では、このノエス—ノエマ関係の分析が「地平」の生成の分析によって動態化され、この「発生的現象

学」への現象学のさらなる転回のなかで中期現象学の「ノエマ」概念が「類型」概念へと転位し、そうした分析の深まりのなかで逆説的にも「現象学的還元」という現象学の初動操作そのものが最終的に貫徹不可能になる事情をあきらかにする。そして最終章で、こうした現象学による学問の基礎づけの理念自体が内蔵する限界を示したあと、それにもかかわらず哲学の方法としての現象学が可能であるとすれば、フッサールの現象学に内在する目的論的ともいえる形而上学的前提を解除するか、命題論と存在論とを等置するというもうひとつの形而上学的前提を解除して「真偽なき世界の現象学」をめざすしかないと結論づける。

## 論文審査の結果の要旨

究極的な基礎からの「学問の基礎づけ」をめざすフッサールの現象学の理念を論じるときに、従来のようにその究極性を問いつめるあまり、時間論——意識の時間的自己構成という問題——に傾きがちであった研究から一步距離を置いて、むしろフッサールがその課題を新しい論理学の構築というかたちでめざしていたその構想そのものを、当時の数学理論とも関係づけながら丹念に跡づけ、その構想が論理学としてどのような特徴をもつものであったかを論じるところに、本論文のオリジナリティがある。その努力は、とくに最初期の『算術の哲学』の読解やそれをめぐる諸解釈の検討、当時の数学理論の検討などによくうかがわれる。フッサールの現象学的思考の特徴を、「諸学問の基礎づけ」という動機と、(構成するものと構成されるものとの)「相関関係」に定位した思考態度とに求める姿勢は一貫しており、論文として非常に体系性の認められるものである。そういう一貫した視点から見えてくるものは、「以下同様」という算術形式が晩年の「類型」概念にまで姿を変えて維持されていることの指摘など、少なからずある。

細部に眼をやれば、たとえば論理学における「無矛盾性」の概念と現象学における「一律調和性」の概念との関連や、真理論としての現象学の位置づけ——哲学の伝統との関連でいえば、整合説か合致説か——など、さらに突っ込んだ議論が必要な部分がある。「完全な現象学的還元」の不可能性をあきらかにする議論に、さらにいくつかの視点がありうることで、現象学のこれからの可能性を展望するときに、レヴィナスのみならず、ハイデガーやメルロ＝ポンティ、デリダなどの試みも参照されるべきであったと指摘することもできる。が、申請者は本論文以外の論考ではこれらをめぐる議論も試みており——いずれ申請者自身によってさらに広い視野から現象学の可能性と限界についての著述がなされることであろう——、本論文自体が内容的に完結したものであることは確かである。

膨大な先行諸研究を渉猟したうえで、論理学という視点から現象学の可能性と限界を論じた本論文は、これまでの現象学研究の欠落を埋めるという大きな功績をもっており、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。